
笑顔を彼女に

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔を彼女に

【Nコード】

N4327I

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

『貴方は本当に私を愛してくれる？』

まるで白昼夢のように彼女の笑顔が思い出され、きりきりと胃が痛む。

吐きそうになってうずくまっていると、大丈夫かと親切な人が声をかけてくれた。

俺は大丈夫ですと答え、重い体を引きずり学校へ行く。

『貴方は本当に私を愛してくれる？』

まるで白昼夢のように彼女の笑顔が思い出され、きりきりと胃が痛む。

吐きそうになってうずくまっていると、大丈夫かと親切な人が声をかけてくれた。

俺は大丈夫ですと答え、重い体を引きずり学校へ行く。

教室のドアをガラリと開くと彼女がいた。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

彼女は昨日何もなかったように自然に笑いかけてきた。

そして、俺も同じように笑えているはずだ。

目尻を下げて、口角を上げ、歯は見せていただろうか？

そこはあまり意識しすぎるとかえって不自然になるか？

声は？出していた？

どんな声？

俺はどんな声で笑っていた？

「何？元気ないじゃん。もしかして昨日眠れなかった？若いからって毎晩精出し過ぎんなよ」

「ば、馬鹿野郎。朝っぱらから下ネタなんて、お前、ほんとと最低だな」

「は？下ネタ？何勘違いしてんの？これだから思春期の男ってのは、頭ん中エロばっかなんだから」

「違うわ！昨日はずっとお前の事考えて・・・」

そう叫びかけて、周りの空気が変になっているのに気付く。

「何？私に惚れた？」

「もう、知らん！勝手にしろ！」

俺は顔を真っ赤にして自分の席にずんずんと進み、机の上に突っ伏した。

胸が苦しくて、泣きそうだった。

彼女は本当に昨日の事を無かったことにしてみたいだ。

なあ、俺はどうすればいい？

お前のように何もなかったように接すればいいか？

それとも他に何かいい方法があるのか？

教えてくれとは言わない。

ただ一緒に考えさせて欲しい。

一番良い道を。

それさえも許してはくれないのだと、俺は・・・悲しかった。

それは昨日の事。

俺は彼女に愛の告白を終え、期待と不安にドキドキと胸を高鳴らせていた。

待っていた答えは返ってこず、

「ねえ、私も少し話していい？」

と彼女は笑った。

「私の家族の話。少しも面白くない話かも知れど、ごめんね」

そう謝罪から始まった話は、確かに重い話で、

「私の父親は今、刑務所にいて・・・」

原因はDV。

「私の母親は私を置いてどこかへ行ってしまったて、今は・・・」

どこにいるか分からない。

けれど、彼女は母親を恨んでいないと付け加える。

私が母親だったら同じ事をしたかもしれないからと。

「それから親戚の人が私の変化にやつと気付いてくれて・・・」

まるで他人事のように、本屋で売っている小説の話をするように彼女

は笑いながら彼女を語る。

俺はいたたまれず、彼女の肩を掴んだ。

それから悩んだ。

彼女を抱きしめるべきか、何か言葉をかけるべきか。

俺には抱きしめる勇氣も無ければ、何もいい言葉など浮かばなかった。

気が付けば彼女が痛がつて、少し顔をゆがめていた。

しまった。

古傷を刺激してしまったろうか、それとも自分が思うよりもはるかに強く彼女の肩を掴んでしまっていたのだろうか。

「ごめん」

その謝罪の言葉がスイッチだったのかのように、俺の目からは涙があふれてきた。

うなだれ彼女に頭を垂れる。

そんな俺を慰めるように、

「気にしてないって。私の父親も私を殴った後よく涙流して謝ってたよ」

と彼女は笑った。

多分彼女は冗談のつもりなのだろうが、全然笑えない。

むしろ俺にとどめをさしたと言ってもいい。

「ねえ、こんな私だけど。貴方は本当に私の事愛してくれる？」

俺は彼女の闇の部分の一端を垣間見たにすぎないのだろう。

確かに俺の中にもどうしようもない闇の部分があるけれども、それは他人と比較しようも無いものかもしれないけれど、彼女の闇は深く底の見えないものに見えた。

俺は彼女の問いかけには答えられず、ただ泣きじゃくって、神に祈った。

彼女に本当の笑顔をあげてください・・・と。

けれどもそこには神様なんていなくて。

俺を笑いながら慰める彼女と。

ただすがりついて泣きつく俺がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4327i/>

笑顔を彼女に

2011年1月9日02時15分発行